何でもアリの転生者

toni-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
何でもアリの転生者

【Ｎコード】
Ｎ９５６７Ｌ

【作者名】
ｔｏｎｉ－

【あらすじ】
平凡な二次オタクの桜井　龍夜は死神の部下のミスで死んだ。死神は責任をとって、チート＋転生させてくれるという。死神のノリでかなりチートになった龍夜が
リリカルなのはの世界で暴れます。
かなりご都合主義です。
（この作品は初めて投稿したものです。色々おかしいなところもあるでしょうが勘弁してください。後、更新は不定期です。）

プロローグ（前書き）

やっと投稿できました。

色々ありますがとりあえず読んでください。

プロローグ

Ｓｉｄｅ　？？？

俺は桜井（さくらい）　龍夜（りゅうや）今俺は自分自身を見下ろしている。
見下ろした先にはミンチになった自分。

龍「なんで俺があそこに？」

確かリリカルなのはの本を買って喫茶店の外で一服していて・・・・
そうだ、いきなりトラックが突っ込んできたんだ。
あれ？ちょっと待てよ・・・・・・・まさか！俺死んだのか？

？「その通りデス。」

と、後ろに黒いフードを被り大きな鎌を持った人（？）がいました。
うん、見たまんま死神ですね。

死神「はい！見たまんま死神な死神デス。」

ご丁寧に語尾はデスだし。

龍「で、その死神さんが何の用ですか？」

死神「え～～～っと、実に申し上げにくいのですが
あなたの死はこちらのミスなんですよ。」

え！何言ってるのこの人。

死神「本来あなたは後、６０年は生きるはずだったんですけど、
部下が生を管理しているノートに新たな情報を書いてる
ときに間違ってあなたの欄を消してしまったためにあなたは
死んでしまったんデスよ。」

マジでぇぇぇぇぇぇぇぇ！

龍「何してんだよ。俺はそんなことで死んだのか！」

死神「なので、責任と取るという感じであなたには転生してもらいます。」

龍「マジ！」

死神「本気と書いてマジと読む。」

うわぁ、ベタなネタがきた。

死神「転生先はあなたがあなたが死んだとき持っていた漫画、
リリカルなのはの世界にしておきます。」

え！おっシャァァァァ、原作ブレイクするぞぉぉぉぉぉぉ。

死神「それと転生にお決まりのチートをつけるので１０個ほど考えてください。」

龍「なんか多くね？」
多いのはうれしいけど。

死神「まぁ、ぶっちゃけた話私たち神と呼ばれる者たちは基本暇なので思いっきり
原作ブレイク的なことをしてくれみたいな感じデス。」

それでいいのか神、いや死神。
それにしても１０個か・・・・・よし！

龍「まず、一つ目は魔力をＥＸランクに。」

死神「ＯＫです。」

龍「二つ目は身体能力最強化」

死神「最強化は無理ですけど、鍛えばどこまでも伸びるようにときます。」

そっちのほうがチートじゃね？

死神「気にしない、気にしない。」

龍「三つ目はデバイス、ストレーンジと魔道書がほしい。」

死神「わかりました。ストレーンジのほうは後で想像してください。
魔道書のほうは始原（しげん）と終極（しゅうきょく）の魔道書という
ロストロギア的なので。（え？大丈夫なの？）」

死神「原作ブレイクするならこれくらいはありデス。（　そ、そうか。）」

龍「じゃあ、四つ目はあらゆる漫画やアニメゲームの世界の
魔法や技術に関する知識。」

死神「これは、魔道書の方に入れておきます。」

龍「五つ目は遊戯王のモンスター召喚能力。」

死神「ハイハイ、これも魔道書に入れとくね。」

遊戯王結構好きなんだよね。・・・・でも？

龍「これ魔道書が奪われたりしたらヤバくね？」

死神「主以外は使えないし所持できないし触れないから大丈夫！」

なるほど、次は。

龍「六つ目は後四つの能力を後で決めさせてほしい。」

死神「それは原作進行中にとかですか？」

龍「そう、今はほかに思いつかないから。」

死神「わかりました。じゃあ残り四つは後で決めてください。決まったら
私に念話してください。」

龍「わかった。」

死神「では、今から送ります。」

よし、行きますか。そう決意した矢先。

「バタン」と床が開いた。

龍「へ？おきまりのこれかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。」

と叫びながら穴の中に消えていった。

プロローグ（後書き）

ト「どうもトニーです。初めて投稿しました。」

龍「主人公の龍夜だ。これから二人で色々Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩだぜ。」

ト「字が違う！なんかどっかの魔王になってるぞ。」

龍「冗談だ。」

ト「まったく。」

龍「で、これからの方針はどうする？」

ト「ウ～ン、まだ細かいとこは詰めてないけど大まかな流れはある。」

龍「ほー、でどんな風に？」

ト「無印から入って無印とＡｓを流す感じでＳｔＳまでの間とＳｔＳを濃くみたいな感じで。」

龍「できるか？」

ト「今後の俺次第？」

龍「まあ、気楽に行こう。」

ト「気楽に行けたらいいなー。」

次回はプロフィールで。

主人公設定（現時点）（前書き）

主人公設定（現段階）
前書き　主人公の設定です。

謎の部分が多いですがこれからの話で明らかになってきます。

決まってないところもありますが、どうぞ。

主人公設定（現時点）

●主人公

桜井（さくらい）　龍夜（りゅうや）

術式　ベルカとミッドの混合ハイブリット

●ステータス

魔力　A　（リミッターをかけている）

筋力　B（まだまだ伸びる）

耐久　C（上記に同じ）

敏捷　A（上記に同じ）

幸運　S（運はかなりいい）

魔道師ランク　AA

●能力

1，魔力EX・・・・・魔力が無茶苦茶多い具体的には、なのは×100人位。

2、身体能力強化・・・・名前とは裏腹にすぐどうなるものではない。

ただ、鍛えれば鍛えただけ際限なく強くなる。

肉体的にも、魔力的にも。

3、あらゆる漫画やゲームの世界の魔法や技術に関する知識。・・・・名前の通りあらゆる漫画やゲームの世界の魔法や技術に関する知識を持っている。（正確には魔道書の中に。）

4、遊戯王のモンスター召喚能力・・これも名前の通り遊戯王のモンスターを召喚出来る。召喚の術式は魔道書の中。

5、？？？？？？？？（話の進行によって追加予定）

●デバイス

クロノス・・・・・・・AI搭載型のアームドデバイスであり四っの姿がある。

1stフォーム：見た目FF7のバースタソード。

2ndフォーム：見た目？？？？？？？？？

???。
3ndフォーム：見た目?????????
???。
フルドライブ：見た目?????????
???。

始原（しげん）始原と終極（しゅうきょく）の魔道書・・・・死神に頼んでもらった魔道書、能力3と4のほかに色々なことが書かれている。主である龍也と管制人格融合機であるリーネ以外には使えないし所持できないしそもそも触れない。

リーネ・・・・・・・始原（しげん）と終極（しゅうきょく）魔道書の管制人格融合機性格は冷静沈着いつも落ち着いていてたまにボケる龍也のツッコミ役もしている。

?????????（こちらも、進行によって追加予定））

主人公設定（現時点）（後書き）

ト「とりあえずの設定です。」

龍「かなりアバウトだな。」

ト「まあ、こちらにも色々あるということで。」

龍「それはいいが、この後は？」

ト「え！それはもう直接鳴海氏に行きますよ！」

龍「マジ。」

ト「マジです。」

龍「なぜ？」

ト「作者権限」

龍「・・・・・・・・。」

次回、そして俺は鳴海に来た。

そして俺は海鳴に来た。（前書き）

やっと話が始まります。

おかしなところもあるでしょうが。

どうかご勘弁を。

そして俺は海鳴に来た。

Ｓｉｄｅ　龍也

えーっと、桜井　龍也。現在絶賛落下中・・・・。

龍「あの死神め。あんなベタな展開でこんなベタなオチ（落ち）は無いだろう。」

現在、上空４０００メートルを落下中です。このままだと死ぬな。・・・どうしよう？

？＜マ・ター・・・・・マスター＞

うん？声がする・・・・・空耳か？

？＜マスター！＞

「これは？」

顔をキョロキョロしていると首から剣の形をしたアクセサリーから声がしていた。

？＜私はあなたのデバイスです。＞

そうか、そういえばデバイスを頼んだな。・・・・あれこれを使えば何とかなるんじゃ？

龍「よし、セットアップだ。」

？＜残念ですが、それはできません。＞

龍「何故、デバイスだろう？」

？＜まだ、私の名前が決まってません。＞

あ！そうだったぁぁぁぁぁぁぁぁ。・・・・・よし！

龍「お前の名前はクロノスだ。」

別に、某黒猫の組織からとった訳ではなく単なる思い付きだ。

ク＜了解！名称クロノス。マスターに桜井　龍也を登録・・・・セットスタンバイ。＞

龍「クロノス・・セットアップ。」

現在、上空１５００メートル。黒い光が強く光ったと思ったら消えそこからは、基本黒色で白いラインが所々に入ったＢＪ（簡単に言ううと
クロノのＢＪに大きなマントを付け騎士甲冑化したもの。）を着た龍也がいた。

龍「ふぅー、間一髪・・・いや危機一髪だな。」

ク＜そうでしょうか結構余裕があるように見えましたが？＞

クロノスお前から見たらそうかもそれないが、こっちは内心ヒヤヒヤ（ヤッホー。）？

死神「え～こちら死神こちら死神聞こえたら応答を・・・・・・。」

龍「何が！応答だぁぁぁぁ。」

いきなり、あんなとこに出しやがって。

死神「あ～それは・・・こちらのミスデス。はい。」

龍「なぁそんな簡単にミスとかして大丈夫なのか？」

もしかして、俺を死なせたのこいつじゃないのか？

死神「すいません。慣れてなくてこういう事態に。」

まぁ、そうだろうこういう事態が多発してたらクビになってるだろうな。

てか、神や死神にクビとかあるのか？・・・・・・・

死神「あの～、聞いてます？」

龍「ん？あぁそういえば何の用？」

死神「状況の説明と魔道書をそっちに送るという連絡デス。」

そうか！魔道書まだ貰ってなかった。

龍「で、状況ってのは？」

死神「送る場所だけでなく時間も間違えたのデス。」

はぁ？こいつ、本当に大丈夫か？

龍「どれくらい？」

死神「最初は、リリカルなのはでいう無印の始まる前にするつもりが、
　もう始まって次元震が起こったあたりデス。」

なにぃぃぃ～！！ではは悪魔と死神（金髪）は出会った後、なのか！！

龍「はぁぁぁぁ～、介入のタイミングどうしよう？」

当初の予定ではは先にフェイトに接近してフェイト側で動いて秘密裏になのはを助けるつもりだったのに。

今からだと管理局が近いうちにくるから、介入しづらい。

・・・・・・・・・・・・・・1時間後・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

龍「よし！」

もう、こうなったらヤケだ。

死神「お！決まりましたか。」

龍「ああ。まず第三者として介入する。そして、思いっきり管理局に敵対してやる。」

管理局は元から気に入らなかったからな、とことん邪魔してやるぜ。

死神「しかし、それだと次元犯罪者として指名手配されてしまいますよ？」

フッフッフ、なめてもらっては困る。

龍「何のためのチート能力だよ。管理局の所属じゃないなら質量系使い放題だろ。」

死神「確かに。すでに原作ブレイクの予感が！では、魔道書を渡します。」

パァーと光ったと思ったら目の前にかなりゴツイ魔道書があった。

死神「そうそう、一応住居と資金は用意したしました。」

死神「では、がんばってくださいね。私もたまに様子見に来るので～。」

そう言うと死神は通帳と地図を渡し少しずつ薄くなって消えた。

てか、また来るつもりかよ。

Ｓｉｄｅ　死神

ふふふ、面白くなりそうですね。
今まであそこまで真っ向から原作ブレイクする人もいませんでしたからね。
え！他にも転生者がいたのかって？
ええ、いましたとも。しかし、私ではなく大抵ゼウスやオーディンが担当
していたので今回私は初めてなのですよ。
なんで私がそんなこと（転生＋チート）が出来るかって？
あ！申し遅れました。私の名はサリエル、一応大天使なのですが
死を司ることから死神の長をやっております。
では。

Ｓｉｄｅ　龍也

ブルッ・・・何かとてつもなくいやな予感が。
寒気というより死に対する恐怖に近い感じだ。
龍「さて、始原と終極の魔道書・・起動。」
始原と終極の魔道書＜主を確認・・・初期起動開始・・・・管制人格を召喚。＞
魔道書から光の弾が出てきて徐々に人の形をとっていく。

？＜あなたが私の主か？＞

そこには、見た目１８、９歳くらいの女性がいた。
髪は黒に白のメッシュが入っていて目は薄めの赤である。

龍「そうだ、俺は桜井　龍也。後、主より龍也と呼んでくれ。」

？＜わかりました龍也。私はリーネ、始原と終極の魔道書の管制人格融合機です。＞

やや事務的なやり取りの後、俺たちは死神が用意した住居に向かった。
その途中、通帳を開けてみると・・・・・

龍也「な、な、なんじゃこりゃぁぁぁぁぁ。」

思わず叫んでしまった。だってそうだろ軽く１０億はあったんだぞ残高。

リ＜まぁ、衣食に困らなくてすみそうですね。＞

リーネ冷静すぎるだろ。

ク＜マスター今は深夜ですよ～安眠妨害ですよ～。＞

クロノスはフォローすらしてくてない。

そんなこんなで、着きました。

あ、そういえば大切なこと忘れてた。

龍「クロノス、俺の魔力を一般人にしといてくれ。リーネも、
　管理局とかにばれると面倒だから。」

ク＜了解。・・・・・・・完了しました。＞

リ＜わかりました。＞

そうして、俺たちの海鳴での１日（？）が終わろうとしていた。

そして俺は海鳴に来た。（後書き）

ト「なんとか、書けたぜ。」

龍「ホントになんとかだな。」

ト「今回は、説明的な内容だったかな？」

龍「なぜ、疑問形。」

ト「いや、結構ノリと勢いで書いたみたいな。」

龍「大丈夫なのかそれ？」

ト「う～ん、どこかで破綻するかも知れない。」

龍「ヤバいだろそれ。」

ト「だから、少し詰めてから書くことにしよう。」

龍「それは、次の更新が少し遅れるということか？」

ト「そう。定期的にとかはたぶん無理。」

龍「そうか。まぁ色々忙しい時もあるからな。」

ト「では、今日はこのあたりで。」

次回魔王？いや今は悪魔か！

魔王？いや今は悪魔か（前書き）

原作キャラ登場です。

キャラの性格や口調が結構大変です。

キャラが崩壊してるところもあるかも知れません。

ご了承ください。

ＰＳ：原キャラｓｉｄｅは書けたらということで。

魔王？いや今は悪魔か

龍也達が海鳴に来た次の日、龍也は自分たちの
住居になったとあるマンションの一室で会（？）をしていた。

ｓｉｄｅ龍也

龍「さて、何からしようか。」

ク＜やはり、拠点の強化？＞

何故、疑問形。

リ＜いえ、戦力強化かと。＞

二人の言うこともっともだけど。う～ん・・・・・・・。

・・・・・・そうだ！工房でも作ってみようか。

リ＜龍也？どこに行くのですか？＞

おもむろに立ち上がった俺にリーネは問いかけてきた。

龍「いや、二人の意見をまとめて工房でも作ろうかと。」

そう、物や兵器など作ろうにも作る場所がなくては話にならない。
部屋の中で作って何か問題でも起きたら後が面倒だ。
そして工房そのものが拠点になりうる。

龍「つーわけでクロノス、この部屋に魔力遮結界その内側に空間遮断結界。
　　リーネは魔道書起動。」
リ　ク＜了解（しました。）＞
そう言うとすぐに準備に掛かった。
龍「リーネ、検索、空間魔法と次元転移魔法。」
空間は言わずとも、次元転移は様々な次元世界に行くのに必要。
リーネ＜検索開始・・・・・・・ヒットしました。＞
リーネが検索し終えると白紙の部分に何やら文字が浮かんできた。
さて、後は術式の設定と・・・・・何か作るための材料か。
龍「リーネ、材料はどうすればいいと思う？」
リ＜次元世界に行って探すしかありませんね。＞
龍「え？・・・そうなの？」
リ＜はい、そもそもそう言った材料はこの地球で売られて無いでしょうから。＞
困った。取りに行くのは構わないが、その間に介入のタイミングを逃したくない。

え?介入のタイミングがどこかって、それはまだ秘密。

龍「仕方がない当分は術式構成と自己鍛錬だな。」

少し出かけてくるか。

龍「リーネ、俺少し出かけてくるわ。」

リ＜では、私も買い出しに行きます。＞

リーネ・・・なんか主婦みたい。

ク＜私は?＞

龍「お前は留守番。」

ク＜そんな～。＞

クロノスはギャグキャラになりつつある。

出かけてから約1時間、俺はある意味危機的（？）な状況に立たされている。

？「あの～、聞こえてますか？」

なぜかって？それはな・・・・・・目の前に魔王・・・・いや悪魔がいる。

どうしてこうなったか、回想スタート。

ーーーーーーーー10分前ーーーーーーーーーーーー

リーネと別れた俺は1人町を散策していた

龍「やっぱり知っていると実際に見るは違うな～」

そんなことを思いつつ、ふと目を向けると

キィィィィィィ。

トラックが女の子を轢きそうになっていた。

龍「危ないいいいい。」

？「え？」

間一髪、車に轢かれそうにになった女の子を助けれた。

いくら9歳の体と言ってもチート使用だった。普通の9歳身体能力を軽く超えていたのだった。

？「あ、ありがとうございました。」

轢かれそうになった子がお礼を言ってきた。。

龍「いや、しかし信号無視とは危ないな。」

？「ご、ごめんなさい。急いでいたから。」

龍「まぁ、次は信号無視するなよ。」

しかし、この子どこかで見たことのあるような無いような？

そう思いつつ俺が立ち去ろうとすると。

？「待って、名前なんていうの？」

龍「ん？・・あぁ桜井　龍也だ。」

？「私は、高町なのは。」

・・・・・・なにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！

ーーーーーーーーーーー回想終了ーーーーーーーーーーー

な「あの～、聞こえてますか？」

龍「あ、あぁ聞こえてる。」

いきなり魔王とエンカウントとは・・・・・しかし、このままだと。

な「じゃあお礼もしたいし家に来ない？私にの家、翠屋って喫茶店
なの。」

やっぱりか。このまま付いていくと確実に兄（シスコン）に襲撃されるだろうな。
・・・・・よし。

龍「せっかくだけど、お姉ちゃんと分担で買い物をしていてもう帰
ってるかも知れないから」

嘘です。ちなみに、表向きの家族構成としてリーネ（姉）、俺（弟）
になっている。

な「そう、残念なの。」

そんな泣きそうな顔しないで良心が気づ付く。

龍「まぁ、いつか機会があればお姉ちゃんと行くよ。」

な「うん！約束なの。」

いきなり元気になった。見かけは子供でも精神年齢が１９だからだろうな違和感感じるのは。

その後、なのはは走って帰って行った。

龍「さて、俺も帰って工房製作にとりかかりますか。」

こうして、俺の海鳴の二日目が過ぎていく。

魔王？いや今は悪魔か（後書き）

ト「以上なのはとの邂逅でした。」

龍「どこかのリポーターにみたいになってるぞ。」

ト「気にしない気にしない」

龍「まあいいか。」

ト「ええっと、ＸＹＺ様　訂正の指摘ありがとうございました。」

龍「次からは気つけろよ。」

ト「ほかの方も訂正したほうがいいと思ったところは行ってください。できる限り訂正します。」

龍「できる限り？」

ト「都合で訂正できないところも出てくるだろうから。」

龍「なるほど。」

ト「さて、次回ですがまたもや邂逅第二弾」

龍「順番的にあの子か？」

ト「さて、どうでしょう。それは次回に。」

龍「そろそろ、戦闘とか無いのか。クロノス出番が少なくてギャグキャラ化してき　てるからな。」

ト「それは、次回の次回あたりに予定してます。」

龍「あと、すこしか。」

ト「そういうこと。では。」

次回　お隣さんは死神（金髪）！？

お隣さんは死神（金髪）！？　（前書き）

今のところなんとか投稿できてる。

まだネタと時間があるからいけるけど。

いつまで続くか。

どうぞ。

ｓｉｄｅ龍也

俺たちが海鳴に来てなのは（悪魔）との遭遇から3日が経った。あれから一度、翠屋に行った。
なのはが俺が助けた時の話を家族にしていたのか、両親からはいきなりお礼を言われ、
そして兄（シスコン）からは終始殺気を向けられていた。理由は簡単、
なのはが俺にべったりとくっ付くいて離れないからである。

そして、この3日の間に工房も当初の目的の7割完成した。
本当はもっと掛かるんだけどここで某錬金術師の錬金術と魔法を組み合わせて
空間練成みたいな感じで作った。
ただ、1区画作るのにめっちゃ体力（魔力と一緒で減っていく）と精神力（集中するため）
を使うのだ魔力は平気でも他が持たない。訓練スペースが出来たらもっと本格的に修行しよう。

そんなこんなで、今日を迎えた。

龍「さて今日も工房製作しますか。」

リ＜では、私は買いもに行ってきます。＞

リーネずいぶん家庭的になったな。
そう思っていると不意に隣の部屋から魔力を感じた。

龍「ん？・・・魔力？隣の部屋から？」

ク＜はい。魔力反応が確かにありますね。＞

リ＜それに・・・魔力生命体、簡単に言うと使い魔の反応もあります。＞

そんなことも感じ取るってリーネ、どれだけハイスペックなんだ。

あれ？でも・・・・このパターンって魔力、マンション、使い魔・・・・・！！！

まさか！！そう思って急いで玄関からでたちょうどその時向こうも玄関から出てきた。

？「！・・・・・誰！？」

龍「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

あちゃ～、やっぱりそうか。

龍「４日前にここに引っ越してきた桜井　龍也です。君は？」

そう言って自己紹介すると。

？「・・・・・フェイト・テスタロッサ。」

はい。死神（金髪）ですね。まさか、お隣とは・・・・・・死神のやつめ。

龍「何はともあれ、お隣さんなのでよろしく。」

そう言って笑いかけると。

フェ「／／／／／／／／／。」

なぜか赤くなった。

フェ「こ、こちらこそ。」

そう言って部屋の中に引き返して行った。

龍「・・・まさかこんな早くに会うとは。」

なのはに続いてフェイト、この調子じゃはやてともすぐに会いそうだな。

そう思いつつ俺も部屋の中に戻った。

ｓｉｄｅフェイト

最初はいきなりでびっくりした。

？「！・・・・誰！？」

一応警戒して聞いた。

龍「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

黙ってる。もしかしてこの人もジュエシードを狙ってる？

龍「４日前にここに引っ越してきた桜井　龍也です。君は？」

ただ間をあけただけ？一応隣だし名前は返さないと。

？「・・・・・フェイト・テスタロッサ。」

龍「何はともあれ、お隣さんなのでよろしく。」

！！っ。

フェ「／／／／／／／／。」

な、なに見とれてるの。ヤバい早く部屋に戻ろう。

フェ「こ、こちらこそ。」

そう言って急いで部屋に戻った。

フェ「はぁ～。」

何とか落ち着きを取り戻し、リビングに行くと。

？「どうしたんだい、フェイト？」

フェ「アルフ。」

目の前にいる大きめの犬はアルフ。見た目は犬みたいでも私の大切

な使い魔だ。

フェ「なんでもないよ。ただ・・・」

ア「ただ？」

フェ「隣に新しい人が引っ越してきてた。」

ア「へぇ～、そうなんだ。」

とりあえず悪い人ではないと思うけど、何か・・・・・今はいいよね。

ｓｉｄｅ龍也

龍「さて、工房製作の続きといきますか。」

そう言って魔力遮断と空間遮断の結界を張った。

魔力遮断は言わずもだが、空間遮断は音やその他が外部に出ないようにするため。

ただでさえ空間練成をしているのだ、なにかあっては困る。

龍「今日中に仕上げるか。リーネ、クロノスサポート頼むぞ。」

ク　リ＜了解（しました。）＞

そうして練成を開始する。

空間練成と言っても空間魔法の術式に練成陣の術式を組み込んで床に書くのではなく
クロノスが陣を展開して後は、練成していく。
だが、あまり使い勝手のいいものではない。魔力は問題なくても体力と精神力がすごく減るし、
リーネとクロノスのサポートがなくては無理。まあ、人数的にも場所的にも状況的にもこれがいいんだろうとは思うけど。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー2時間後ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

龍「はぁ〜〜〜〜、やっと出来た。」

リ＜お疲れ様です。＞

そう言ってリーネは濡れたタオルを持ってきてくれた。

龍「ありがと、さて出来たいいが疲れて眠い。確認は明日だな。」

リ＜そうですね。早めに寝ますか。＞

こうして、また海鳴での1日が終わっていく。

お隣さんは死神（金髪）！？　（後書き）

ト「フェイトとの出会いを書いてみた。」

龍「まぁ、予想はしていたが。」

ト「しかし、さっそくフラグっぽいのが立ったな（ボソ）」

龍「ん？なんか言ったか？」

ト「いえいえ、何でもないです。」

龍「そうか？ところで次回はとうとう。」

ト「もちろん、数々のＫＹ伝説を作っているあの人が！！」

龍「そうか・・・・ようやくか、クックック。」

ト「おぉ。無気味な笑い。」

龍「いやぁ、楽しみでな。」

ト「まぁほどほどにな。」

次回　返事がない・・ただのＫＹのようだ。

返事がない・・ただのＫＹのようだ（前書き）

遅くなりました。

色々考えてたらいつのまにか。

少々矛盾があるかも。

どうぞ。

返事がない・・ただのＫＹのようだ

ｓｉｄｅ龍也

フェイトとの邂逅から2日後、ジュエルシードの発動を感知した。

龍「時期的にも場所的にあの木の化け物か。ということは管理局もといＫＹ執務官が来るのか」

リ＜どうします？・・・・・・介入すると色々厄介ですが＞

そーなんだよな、管理局に目を付けられるのは厄介なんだよな。しかし！！！

龍「ここが、一番の介入タイミングだと思う。正体ばれないように道化の仮面使うか」

道化の仮面、それは2日前完成した工房で作った変装いや変身道具。付けてる間は基本ピエロのような格好になり、魔法や機械などの探知系の物を無効にしてくれる。

リ＜では、私も仮面を付け同行しましょう＞

よし！初めての実戦だ。

龍「クロノスセットアップ」

ク＜セットアップ＞

ＢＪを展開しバスターソードを持った格好になり、仮面を付ける。

龍「フッフッフッ、待っていろＫＹ執務官！！」

そう言って空を飛んで行く。

場所は移り海鳴臨海公園

ｓｉｄｅなのは

今、私の目の前に木の姿をした化け物がいるの。

な「ねぇ、ユーノくんあれどうしたらいいの」

ユ「どうしたらって・・・・・とにかく近付くのは危険だから
　砲撃で遠距離から狙った方がいいと思う」

そうだよね。私まだ魔法使いこなせてないし。

な「うん！いくよユーノくん」

・・・・・・しばらく後

ｓｉｄｅ龍也

お！もう戦闘が始まっているのか。

てか、あれってもう止めを刺すところじゃん。

な「ディバイン！バスター」

フェ「貫け、轟雷！サンダースマッシャー」

二人の攻撃の直撃をもらった木の化けものはそのまま倒れ消滅した。

そして、ちょうど二人の間にジュエルシードが浮かんでいる。

フェ「ジュエルシードには衝撃を与えないほうがいいみたいだ」

な「うん、この前みたいになっちゃったらレイジングハートも、
　フェイトちゃんのバルディッシュも壊れるかもしれないしね」

フェ「でも譲れない」

な「・・・・・・本当はお話して解決したいけど」
なのはがレイジングハートを構えて言った。
な「私が勝ったら、お話聞かせてもらうよ！！」
フェ「・・・・・・」
フェイトも頷きバルディッシュを構えた。
その時！！
？「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」
出たぁぁぁぁぁぁ！！！史上最強のＫＹ。それでは行くか。
ク「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせｔ（少し黙ってろ）ぐはぁ！」
思いっきしのドロップキックをかましてやった！
ＫＹはそのまま海面に激突した。
なのはもフェイトも唖然としていた。
龍「さて、うるさい奴も黙らしたし。これは貰って行くよ」
そう言ってジュエルシードを手に取った。

フェ「それを、渡してください」
ア「そうだ。渡たしな」
フェイトはバルディッシュをこっちに向けて言った。
横にはアルフもいる。
な「あなたは、だれですか！？」
ユ「それは危険な物なんだ！」
なのはとユーノも来た。
龍「何者と言われてもね。そうだなとりあえずクラウンとでも名乗っておこうか」
某エクソシストのイノセンスです。はい。
ク「ま、待て、それは時空管理局で（あなたは黙ってなさい）ぐぁぁ！」
近くに控えていたリーネのドロップキックでまた海面に激突したクロノ、
さすがリーネいいタイミング。
リ「クラウンそろそろ」
龍「そうだな」

俺たちが去ろうとすると。
フェイトが攻撃を仕掛けてきた。
フェ「はぁぁぁぁぁ」
サイズフォームで近接戦闘を仕掛けてくるフェイト。しかし甘い。
ブン。フェイトの攻撃は虚空を切った。
フェ「えっ！」
チャキ。フェイトの背中周りに大剣の刃を当てる。
龍「やめておけお前では俺に勝てない。
それより管理局の本隊が来る前に逃げた方がいいんじゃなか」
ア「フェイト！ぐっ」
アルフが向かってくるが、リーネに抑え込まれた。
リ「素直に忠告に従った方がいいのでは？」
フェ「くっ、行くよアルフ。」
ア「フェイト！いいのかい？」
フェ「おそらく私たちでは勝てないよ、それに管理局が来た」
ア「わかったよ。」

そう言って二人は引き揚げた。その時。

ク「くっ逃がしたか。だが君たちには来てもらう」

そう言ってデバイスを向けるクロノ。ＫＹにもほどがあるぞ。

え？なんで逃げなかったかって。

それは・・・・・・・このＫＹを・・（ニヤ）・・・ボコるため。

龍「うっさいな。とりあえず黙っとけ」

そう言って俺特製の結界を展開した。

ク「な、なんだこの結界は！？」

な「ユーノくん、これも結界なの？」

ユ「そうみたいだけど、こんな結界見たことが無い」

この結界は通常の結界に空間操作系の術式を組み込んで位相をズラした結界。

そうだな位相結界とでも呼ぼう。

この世界では、知られていない術式を組み込んであるから管理局には絶対に解けないし、

中の様子のわからない。さぁ、始めよう。

ク「クソ、念話も通信も使えない。おい！何をした」

龍「何って？それはお前をボコるための準備。ちなみに、この結界俺にしか解けないから」

ク「なら、お前を倒すまでだ」

ほんと馬鹿でＫＹだな。

ク「『ブレイズキャノン！』」

いきなりか、しかし直進型だけに避けやすいおそらくは囮。

ク「『スティンガーレイ！』」

またか。俺も実戦は初めてだし色々してみるか。

ドゴォ。シールドを張って防御してみる。

龍「お、なかなかいけるな」

さて、クロノは？

龍「いない？・・・・上か！」

上を見上げると。

ク「『スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！』」

広域攻撃か。なら！

ドゴォン。大きな音と共に命中。

ｓｉｄｅクロノ

今のは・・・・・・入った！後は、奴を連れて戻るだけだ。

ク「ふぅー。少しやりすぎたか」

煙が徐々に晴れてくる。

龍「クックック、その程度か？」

なぁ！そこには無傷の奴、クラウンがいた。

ク「馬鹿な！直撃したはずだ」

龍「答えてやろうか？」

そう言ってクラウンは笑った。

ｓｉｄｅ龍也

龍「答えてやろか？」

とは言っても答えは簡単。

龍「この、クラウンの衣装はバリアジャケットとは違い。
対物、対魔法にお前たちの次元航行艦並みの防御力がある」

それだけの防御力に１人の魔法、しかも広域型が通用するとでも？

ク「馬鹿な！そんなもの聞いたことが無い！」

龍「当然だ。これは俺が作ったものだ。
破りたければ次元航行艦を落とせるだけのの砲撃か収束砲でも撃つんだな」

ク「くっ！」

ふはははは！ＫＹよ所詮貴様はその程度。

龍「では、こちらから行くぞ！貴様の技の進化系をみせてやろう！」

そう言って打ち出すのは遊戯王でもお馴染みの某マジシャンが使うアレ。

ク＜魔力チャージ１００％！＞

龍「いけ！『千本の《サウザンド》ナイフ』」

千本のナイフ、千本と言っても基本的に１００本ずつのシフトで撃つ。

ク「なぁ！クッ！」

咄嗟にシールドを張って防御したようだが。

龍「甘い！千の刃をすべて防ぎきれると思うな！！」

ク＜モード収束＞

そうすると、面で攻撃していたナイフがある地点からクロノめがけて集まっていった。

ク「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！」

シールドを最初の５００で破られ、残り５００をモロに受けた。

龍「まだ終わりじゃないぞ、零距離（ぐはぁ）月牙天衝・・・・大一文字斬り（ぐぁ）」

まだまだぁぁぁぁぁ。俺はクロノスを待機モードににして拳で殴りかかった。

龍「魔力収束・・・桜花崩拳、（ぐえぇ）」

そしてクロノの掴んで、軽く上に放り投げた。

龍「喰らえタダの連続拳」

ドドドドドドドドドドドドドドドッ　ガシ！！

クロノを再び掴み。

龍「さてＫＹ、最後に言い残すことは？」

ク「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事が無い・・・・ただのＫＹのようだ。

龍「やりすぎたか？」

ク＜大丈夫です。心臓は動いていますから生きてはいます＞

そうか、すこ～しやりすぎたかなとは思ったけどこｒ＜ただ＞？

ク＜全身打撲に両手両足骨折、下手すると内臓破裂の可能性も＞

龍「うおぉぉぉぉい。それはヤバイ！」

結界解除と。

龍「あ～あ～聞こえてるか？管理局の。こいつ早く治療しないとまずいから。ホイッと」

そう言ってＫＹを放すと魔法陣が出てきてＫＹを回収した。

さて、後は。

な「あ、あの～？」

お、来たな。

龍「ん？」

な「あなたはなんでこんなことするの？」

龍「俺がしたかったから」

ユ「な！そんな理由で！」

龍「後もう一つ、管理局が気に入らない」

ユ「なぜ！？彼らは次元世界をｋ（その思想が気に入らないんだよ。）え！？」

龍「よく考えてみろ、どれだけあるかわからない次元世界を管理するなんて
　それこそ神にしか無理だろ人間である以上かならず限界がある。
」

これ、俺がずっと思ってたこと。
自分たちが絶対の存在だと言わんばかりなところが気に入らない。

な「あの～？・・・話がわからないの」

いきなりの訳のわからない話に混乱するなのは。

龍「詳しくはそこのフェレットもどきに聞け！」

ユ「フェ、フェレットもどき！！」

事実だろ。元は人間で変身してるだけなのだから。
そう思いつつ転送準備に入った時。

龍「あ！言うの忘れてた。お前注意した方がいいぞ」

なのはを指さしながら忠告する。

な「え？」

龍「お前の魔力は管理局の奴から見たら強い。せいぜい利用されないようにな。」

ユ「それはどういう意味」

な「？？？？」

龍「他人に振り回されるじゃなく、自分でしっかり進む道を決めろということさ。」

そう言い残し消えた。

残された二人は。

な「どういう意味なのかな？」

ユ「わからない。」

混乱していたのであった。

返事がない・・ただのＫＹのようだ（後書き）

ト「はぁ～」

龍「どうした？」

ト「いや、この後どうしようかと」

龍「決まってないのか？」

ト「ある程度は決まっている」

龍「じゃなんで？」

ト「自分の文才の無さにね？」

龍「あ～、こればかりはな」

ト「まぁ、書き始めたからにはいけるとこまでいくさ。」

龍「そうか、まぁがんばれ」

ト「さて、次回ですが」

龍「どうするんだ？」

ト「はやてとの邂逅か、次の日のそれぞれの行動の一部かのどちらか」

龍「前者はともかく後者は？」

ト「なのはや管理局、そしてお前のＫＹをボコった次の日の行動の一部
を書いていく。いわば、それぞれの思いみたいな。」

龍「なるほど」

ト「なので今回は次回タイトルは出ません。ごめんなさい。」

それぞれの現状。そしてここどこ？（前書き）

少し短いです。

今考えてることを続きに書くと

長くなりすぎて読みにくと思うので分けました。

どうぞ。

それぞれの現状。そしてここどこ？

ＫＹをボコった次の日、俺は物々しい装備整えていた。何故かって？

龍「よし！ではこれより次元世界にて材料探しを行う」

ク＜何故、材料探しなのですか？＞

龍「地球にある材料だけではやはり限界がある。そこで次元世界に行くのだ」

リ＜龍也。準備が整いました＞

龍「では、出発！」

魔法陣が急激に輝き始めた。

ク＜マスター！！魔力を籠めすぎです！！＞

リ＜このままではどこに飛ぶかわかりません＞

龍「そんなこといっｔ」

龍也が言い終わる前に２人＋１は次元世界に飛んだ。

一方その頃アースラでは・・・・・・・・。

ｓｉｄｅリンディ

リ「はぁ～」

本局の廊下で、アースラ艦長リンディ・ハラオウンは1人ため息をついていた。

先日、ロストロギア　ジュエルシードを回収に向かわせた管理局執務官であり
自分の息子でもあるクロノ・ハラオウンが重傷を負ったのだ。

すぐに、回収して本局の医療施設に運んだ。
クロノは今も意識不明、医者の話だと命に別状はないが、早くても全治半年、
現場に復帰するならリハビリを含めて一年は掛かるそうだ。

リ「一体何者なのかしら？」

ジュエルシードを探しているのは2組の魔道士だけだと思っていた。
しかし、クロノを倒したのは見たこともない3組目の魔道士だった。

他の二人の反応を見る限り知らないようだし。
何より見たことも聞いたことも無い装備に結界。

エ「艦長。アースラの発信準備と武装隊の乗り込み完了しました」

そう言って通信を送ってきたのはアースラの管制を担当しているエイミィ。

リ「そう、・・・・ではこれより再度、ジュエルシードの回収に向かいます」

ーーーーーー場所が移って海鳴市、魔王の家こと（魔境）翠屋ーーーーーーー

な「・・・・・・・・・・・・。」

ユ「・・・・・・・・・・・・。」

士「・・・・・・・・・・・・。」

恭「・・・・・・・・・・・・。」

桃「・・・・・・・・・・・・。」

美「・・・・・・・・・・・・。」

高町家＋1の間に重い空気が漂っていた。

事の始まりは昨日龍也が去った後だった。

ーーーーーーーーーーーーー回想ーーーーーーーーーーーーーーー

ユ「なのは、そろそろ引き揚げた方がいいよ。いつ人が来るかわからないから」

な「うん。そうだね」

ガサッ

な　ユ「！！！！！！！」

士「なのは・・・何をしているんだ？それにそのフェレット今喋らなかったか？」

な「お、お父さん！！」

ユ「！！！！！！！！！！！」

魔王の父親こと高町士郎がそこには居た。

な「あ、えと、こ、これは」

ユ「・・・・・・・・・・」

なのはは父親の登場に動揺し更に混乱している。

士「とりあえず帰るぞ。家に帰ってから話してもらおう」

そして、家に帰ったなのはとユーノは士郎にすべて話した。

魔法、ジュエルシード、フェイト、管理局、謎のクラウンのこと全部。

士「そうか、そんなことが。しかしなのはいくら自分に力があっても危険すぎるぞ！」

な「・・・・・・・」

ユ「なのはは悪くありません！元は僕が！」

なのはをかばおうとユーノが弁解する。

士「たしかに君のせいで最初はそうだったろう。
　しかし、その後はなのはにも責任がある」

士郎は裏世界で生きていた時期があるためそういうことには敏感で厳しい。

士「とりあえず今日は寝なさい。明日家族全員の前で説明する」

な「はい」

ユ「わかりました」

2人はかなりまいっていた。

翌日、家族全員の前で説明し現在に至る。

ーーーーーーーーーーーーーー回想終了ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ｓｉｄｅフェイト

フェイト・テスタロッサは自分へ部屋で考え込んでいた。
管理局が来たのは元より突然現れた謎の魔道士についてだ。

フェ「強かったね。彼」

ア「あぁ。奴と一緒にいた奴も相当だよ」

フェイトとアルフは昨日のことを思い出していた。
自分が戦ったことの他に彼があの執務官をボロボロにしたていたのを見たのだ。
結界で中の様子はわからなくてもその前と後の執務官の様子見れば一目瞭然だった。

フェ「でも引けない」

ア「フェイト」

フェイトは決意を新たに決めるが、アルフは心配そうにフェイトを見つめていた。

ｓｉｄｅ龍也

龍「ここはどこ？」

リ＜わかりませんが、これは現実なのでしょうか？＞

ク＜スキャン完了。どうやらここは直径４０キロほどある円形の場所みたいです。
ただし空に浮いた＞
龍也たちは転送の事故でとんでもない所に来てしまったようだ。

それぞれの現状。そしてここどこ？（後書き）

ト「と、まぁそれぞれの現状みたいなのを書いてみた」

龍「それはいいんだが。最後のあれはなんだ？」

ト「あせらない、あせらない。これかの重要な場所なんだから」

龍「そうなか？」

ト「うん。もしかしたらチート化が進むかも」

龍「え？マジで」

ト「それは次回もお楽しみ」

龍「そうか。楽しみにしておこう」

ト「今日はこの辺で」

次回　空中都市！？その名はスカイ＝アーク

空中都市！！な、なんであれが！！（前書き）

時間がかかりました。

ネタはあっても文章にするのが大変で。

自分の文才のなさを感じます。

空中都市！！な、なんであれが！！

ｓｉｄｅ龍也

龍「ここはどこ？」

リ＜わかりませんが、これは現実なのでしょうか？＞

ク＜スキャン完了。どうやらここは直径４０キロほどある円形の場所みたいです。
　ただし空に浮いた＞

マジ！！宙に浮いた円形ＵＦＯ？・・しかし目の前に町らしきもの・・・ラピュタ？

リ＜龍ｙ・・・・龍也！！＞

龍「おぅ！なんだ？」

リ＜なんだ？・ではありません。＞

龍「ごめん、ちょっと考え込んでいたから」

リ「で、どうします？」

龍「クロノス、生体反応は？」

ク＜ありません＞

生物はいないか・・・・・防衛システム位はあるかもな。

龍「とりあえず、探索だ。一応警戒していけ」

リ「わかりました」

ク＜了解＞

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

ーーーーーーーーーーーーーーー1時間経過ーーーーーーーーーー

ーーーーー

龍「今のところ何もないな。」

リ＜しかし、こういう物を空中都市とでも呼ぶんでしょうね＞

リーネ、その言い表しは悪くないが本当に都市かはわからないぞ。

ク＜マスター！！＞」

龍「どうした？」

ク＜熱源反応が複数こちらに向かってきます！！＞

龍「ッ！！クロノスセットアップ！」

ク＜セットアップ＞

熱源反応か・・・・・機械もしくは機械生命体か？

キィィィィィィィィィィ

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

ウソだろ！！

リ＜龍也・・・・あれは何ですか？＞

龍「とりあえず・・・・・逃げるぞ！！」

俺たちは後ろを向き走り出した。

追ってくるのは人型の形を手や肩に武器を装備し足が二脚や逆関節もしくは
四脚だったりする機動兵器みたいな物だった。

マジカ！！マジか！！マジかぁぁぁぁぁぁ！！！

あれ、ＡＣだよアーマード・コアだよ！！細部は少し違うけど見た目がそれだよ！！
確かに鬼が出るか蛇が出るかとは言ったけど、ＡＣってどうなんだよ！！

キィィィィィィィィィィン　ゴゥー

オーバーブースト！！そんなものまであるのか！！

龍「リーネ伏せろ！！」

ブォン・・・・・・・レーザーブレードが頭上を通り過ぎて行った。

リ＜龍也！！＞

龍「ここでは危険だ、開けた場所に移るぞ！！」

何とか逃げ切って広場みたいな所に出た。

龍「リーネ！！ユニゾンだ！！」

リ＜わかりました！！＞

龍　リ「＜ユニゾン・イン＞」

眩い光と共に背中に６対１２枚の羽根が付いた桜井　龍也が現れた。

龍「さぁ、覚悟はいいか機会ども！！『千本（サウザンド）のナイフ』モードフルオープン」

千本の刃がＡＣを襲う。

モードフルーープンは収束の逆で千本を一度に展開し攻撃する。ただし膨大な演算と
緻密な制御が必要なためリーネとユニゾンしてなければ使用は不可能である。

ドォーーン。

龍「リーネどうだ？」

リ＜全ｋッ龍也避けてください！！＞

龍「ッ！！」

ダダダダダダダッダダダ。
すぐさま回避行動をとった。

龍「一機、まだ生きていたのか！？」

煙の中から一機ＡＣが飛び出してきた。
あれをくらって無事とは、対魔法装甲で出来てるのか？

龍「魔法が駄目でも接近戦で勝負してやる！！大一文字切り！！」

しかし、避けられる。
ちっ、さすがに速い。

龍「クロノス！！セカンドフォーム！！」

ク＜了解！セカンドフォーム＞

クロノスをセカンドフォームにする。
セカンドフォームは双剣で高速戦闘重視である。

龍「ソニック！！」

ク＜ソニックムゥーブ＞

ＡＣの背後を取った！！

龍「双刃翔破！！」

剣をクロスそのまま切り裂いた！

ガダン、ダン、ゴドン
音を立てて崩れていくＡＣ。

龍「これで全部か？」

ク＜周辺に熱源反応はありません＞

リ＜こちらでも確認したが問題ない＞

やれやれ。

？＜・・・ザー・・ザー・・・・・・・ザー・・・＞

龍「ん？」

？＜・・だ・・れ・・・・そ・ザー・・い・・・＞

リ＜なんでしょう？通信？＞

ク＜発信源を特定。どうやらこの都市の中心部みたいです＞

中心部か。管理システムか何かか？

龍「言ってみるか」

一行は都市中心部へと向かって行った。

空中都市！！な、なんであれが！！（後書き）

ト「と、まぁこんな感じで書いてみた」

龍「まあ、こんなものか」

？＜もう少し、もう少し＞

龍「ッ！、誰だ！！」

ト「どうかしたか？」

龍「いや、今何か声が？」

ト「あぁー、あの人か」

龍「何！知っているのか！？」

ト「まぁ・・それは・・次回で明らかに」

龍「次回か、教えろ！！」

ト「だが断る作者権限で！！」

龍「・・・・・『千本のナイフ』！！」

ト「甘い、『織天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』！！」

龍「なに！！なぜそれを！？」

ト「フッ、それも次回だ」

龍「クソー俺は何でもありじゃなかったのか？」

ト「作者の前では無意味・・では次回で」

起動！城塞都市スカイ＝アーク！（前書き）

なんか、ヒーロー系のタイトルになってしまった。

実際そこまでのものではないけど

最近、学校の課題が忙しい

起動！城塞都市スカイ＝アーク！

ｓｉｄｅ龍也

「ここが中心部か？」

俺たちはうす暗い部屋の中にいる。

ク＜反応があったのはここです＞

リ＜何もない？・・・・・あれは！？＞

リーネが指さした先には巨大なクリスタルがあった。

大きさはだいたい人２人分位だ。

？＜来てくれたのか＞

龍「お前は誰だ！？」

？＜私はこの城塞都市スカイ＝アークの管制人格、ＳＡＢ－０１０１

開発コー：ユグドラシル＞

龍「城塞都市？・・・スカイ＝アーク？・・・ここは一体」

ユ＜ここはかつてアルハザードの住人によって作られた次元空間の狭間に存在する都市＞

リ＜アルハザード＞

龍「何故こんなものを？」

ユ＜詳しくは知らない、おそらくここで何かをするつもりだったんだろう。私が作られて少したった頃　から誰も来なくなった。そしてここに残ってた最後の科学者が色々作って死んだ＞

誰も来なくなったか・・・・・おそらく次元断層でアルハザードが滅んだんだな。

ク＜あのロボットは？＞

そうだ！なぜＡＣが！？

ユ＜あれは、残っていた科学者が都市の防衛用に作ったもので、それ以上は知らない＞

多分、偶然だろうなただＡＣの形が色々な状況に対応しやすい形というのもあるんだろうが。

龍「どうして俺はここに転移出来た？」

ユ＜わからないが、その魔道書が関係していると思われる。
　その魔道書からここのカギとなる物なのだ＞

始原と終極の魔道書がカギ？・・・・・まさか！？

龍「リーネ」

リ＜はい、接続・・検索・・城塞都市・・スカイ＝アーク・・・ヒットしました！！＞

やはりあったか。

龍「読んでくれ」

リ＜はい、・・・・城塞都市スカイ＝アーク、アルハザードの研究者によって計画された世界創造の第一ステップとして開発された空間に作られた都市。元々は次元世界そのものを作ろうと計画されたが当時のアルハザードの研究者からしても馬鹿げた計画だったため開発は途中で中断。残った数人の科学者のみで開発は続けられたそうです。＞

世界を作るか。

龍「確かに馬鹿にさせるかもしれないな」

ク＜しかし、みたところ一応は成功しているようです。そもそも世

界と次元空間の狭間に存在していること自体が異常といえます＞

まぁ他に虚数空間しかないからなそんな空間。

ユ＜そう、狭間に空間を存在させることには成功した。しかし、当時は空間と私の制御が上手く行かずに都市機能の８０％以上を封印しなければならないほど不安定だった。居住エリアと研究エリアそれぞれの一部と警備システムだけ残して封印、その後誰も来なくなったのと帰れなくなったことからただ１人を除いてここで生き死んでいった＞

なるほど・・・・ん？ただ１人を除いて？

リ＜なぜ？私がカギなのだ！？＞

おそらく、死神の奴がそういう仕様にしたんだろうが・・・・世界的にはどうなってるんだ？

ユ＜元々その魔道書はアルハザードで作られカギとなるプログラムだけいれてここに保管されていた。
　しかし、科学者の１人が持ち出し外の世界に出でようとした。その後から行方不明＞

だからただ1人を除いてだったのか。そういう経緯で彷徨ってたか消滅した魔道書を死神が俺に渡したと。

龍「あれ？じゃあここは今はどうなっているんだ？」

ユ＜今ここは私と防衛システムを残して機能を停止している。もう一つ言うとカギとなる魔道書の主である君が今のここの主に当たる存在なのだが、ただ＞

龍「俺！？」

リ＜だた？＞

ユ＜機動には膨大な魔力が必要となる。本来なら魔道炉を複数使って起動をかけるのだが＞

今はその魔道炉がない、もしくは壊れているか。

ク＜それなら問題無いのでは？＞

龍「クロノス、どういう意味だ？」

ク＜マスターの魔力は膨大です、それこそ発揮すれば次元震さえ起こすほどです＞

マジ！！俺ってそんなに魔力があったのか！？

リ＜なるほど。それをすべて起動にまわせば可能かもしれない＞

ユ＜それほどの魔力を個人で有しているとは＞

龍「俺もびっくりだ」

なら、試してみる価値はあるか。

龍「ユグドラシル、いけそうか」

ユ＜そのレベルの魔力なら理論上は可能だ＞

龍「なら、案内してくれ」

ユグドラシルの案内で俺達は中心部から真上に上がった場所行った。

龍「ここは？」

リ＜王座・・みたいですね＞

ユ＜ここは王の間、あの玉座に座りカギとなるプログラムを発動し魔力を流せばいい＞

なるほど、まるで王を認定する儀式みたいだな。

龍「起動プログラム・・・・発動」

リ＜プログラムの発動を確認・・・魔力の注入を開始＞

ユ＜注入を確認・・現在１０％・・２０％＞

くっ２０％でこれか、結構キツイな。

ユ＜４０％・・５０％・・６０％＞

リ＜龍也、大丈夫ですか？＞

龍「少しキツイかな？」

少しではなくかなりキツイ、魔力的にもだがここまで魔力を使ったのは初めてだから体力的な負荷もな。

ユ＜９０％・・９５％・・９８％・・１００％注入完了・・・起動を開始する＞

ユ＜魔力、生体情報登録・・・同時に都市駆動炉の起動を確認・・王に桜井　龍也を登録・・・起動完了＞

ドサッ・・・それと同時に俺は倒れた。

リ　ク＜龍也（マスター）！！＞

龍＜大丈夫だ。ここまで魔力を消費したのは初めてだからな、その反動だ＞

ユ＜普通なら間違いなく死んでいるぞ。それをただの反動で済ましているのが驚きだ＞

まぁ・・・チート・・だし・・ね。

龍也「悪い、疲れたから寝るわ」

そう言って俺は意識を手放した。

龍「で！なんでお前が目の前にいるんだ！？」

死神「久しぶりに会ってみたくなりまして」

意識を失ったと思ったら、目の前に死神がいた。

龍「ま、ちょうど願いを一つ言おうを思ってたところだしな」

死神「おやおや、一体何を？」

これは、最初はどうかと思ったんだが色々便利だしこれから大変になるからな。

龍「Ｆａｔｅの投影魔術を使えるようにしてくれ」

死神「わかりました。しかし、なぜ投影魔術なのですか？」

龍「最初は宝具にしようと思ったんだが、色々な物を使うことを考えたらこっちの方が使い勝手がいいなと思って」

投影なら色々な物、宝具だけではなくロストロギアなども投影出来そうだしな。

死神「では、入れますね。・・・・そうそう魔術回路は１００万本位にしときましたから」

ひゃk、１００万本だとぉぉぉぉぉぉぉぉ。

龍「なんでまたそんなに！

パチィン、死神が指を鳴らすと

パカ・・・・・地面に穴があいた。

死神「その方が面白いじゃないですかー」

龍「また落ちるのかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

そう言って落ちて言った。

起動！城塞都市スカイ＝アーク！（後書き）

龍「なんか、力押しって感じだな」

ト「すまん、色々忙しくて」

龍「で、これからここを拠点にするのか？」

ト「そのつもり、もっと色々するつもりだ」

龍「しかし、ここでＦａｔｅか」

ト「ほかにも考えてるぞ。ここでゲストを紹介しよう」

龍「ん？いきなりだな」

ト「だからゲストなんだよ、どうぞ」

死神「どうも！こんにちわ」

龍「お前死神！！ここでさっきの仕返しを」

パチィン・・・・パカ。

死神「残念無念また次回ー」

龍「なんの！飛べばもんだいｎ」

パチィン・・・ヒュュュューン・・・ガン

龍「なぜ・・・・タライが・・」

死神「なぜって・・・・お決まりじゃないですか」

ト「哀れ・・・・次回はプレシアのところに殴りこみ?」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9567l/

何でもアリの転生者

2010年10月15日22時35分発行